

アメリカにおける資本主義勃興と Edith Wharton

上 田 み どり*

序

アメリカには王も城もなく、自由と平等を掲げた者たちの理想実験国家としてスタートしたと、解釈するならば、そのためには、旧世界の慣わしを捨て去る方向性を持つ国創りが進められたと考えてよいだろう。アメリカ人の主流は輝く豊かさを求め、階級のない平等社会を突き進んでいったと考えられる。そのためには、昔懐かしい旧世界の慣わしを捨て去らなければならなかった。にもかかわらず、それでも過去を引きずりつつ、新世界の可能性に期待を持ちながらその新機軸に沿う生き方にも当てはまらず、その拮抗関係の緊張する基盤の上で、作品を描き、芸術的高みを試みた作家がいる。

時代は19世紀から20世紀への移行期にあり、科学技術の進歩に伴い、数々の発明品も生まれ、社会の有り様が大きく変容する時期でもあった。広い北米大陸における、鉄道の敷設や、車という現代文明へ向かう技術革新は、人々に時間の概念を変え、それら物質文明の豊かさを実践する道具を製造していった。この産業の発達に伴う経済の動きと連動し、それまでの社会環境は大変革し、人々の暮しや生き方に大きく影響を与えたと思われる。

本論文は、これら変革の時代の経済・社会の動きを E. ウォートンの作品とともに考察する。ある者は、時代の波に追いつき、ある者は置き去りにされた。また、ジェンダー意識及び階級

意識の変化と共に、真の自己実現にたどり着きたいとする登場人物の人間描写と作品を通して、その時代を繁栄する富の配分に預かった者を基盤とするアメリカ主流に対するカウンター・ナラティブとして論じたい。それらは、アメリカにおける、資本主義勃興の動向を察した女性作家 Edith Wharton が、作品に登場する人物に投影し著したと考えられる。

1. アメリカの主題

E. ウォートン (Edith Wharton, 1862-1937) は、師とする H. ジェームズ (Henry James, 1843-1916) から受けた忠告、“アメリカの主題”を探し続けたと思われる。ジェームズは、以前自分が思い描く「知的で文化的、誇り高い精神を兼ね備えた楽しい町」であるはずの、ボストンやニューヨークの町は、20世紀を待つまでもなくその栄光は消えていると嘆いている¹⁾。ジェームズにとって、自ら求めたアメリカ像の消滅により、彼は1883年を境にして60歳になるまでアメリカを訪れることをしない。1904年8月末にマーク・トウェインに会い、9月中旬から10月末まで、ジェームズはレノックスのウォートンを訪れており、その後も、1905年12月21日にはニューヨークのウォートン宅を訪れている。約1ヶ月余り、ニューヨーク、ワシントン西部への旅を続ける。このジェームズの旅は、「欧米に対する底深い両面感情を持つ彼の存在証明」だと大橋健三郎氏は述べている²⁾。ウォートンは、ジェームズのその眼差しを理解し、すべて同調したわけではないと思うが、彼女は似たようなアメリカへの思いや期待、そしてアメ

* 広島経済大学経済学部教授

リカ文明への警告や落胆を‘アメリカ的主题’を求めつつ、女性的感性を持って、彼女の諸作品に著すことになったのではないだろうか。ウォートンの求めたアメリカ的主题を著す代表作として、特に『歓楽の家』(*The House of Mirth*, 1905)に材料が横溢すると思われるので、この作品を中心に検証してみたいと思う。

2. 南北戦争以後のウォートンを取り巻く社会の動き

歴史的観点から見れば、国内戦争である南北戦争は、1861年から1865年の間、商工業を中心とした北部と、大農園、奴隷制度に依存していた南部との対立ということであり、北部の勝利であるのは皆の知るところである。この内乱の結果が、アメリカ北部の産業主義を押し上げることにとなり、その力が全土に強く支配し、急速に産業資本主義国家としてのアメリカが、ひた走ることになる。社会は急に変革されたというわけではない。イギリスの経済状況がさざ波のごとくアメリカに及んだ結果であると解釈できる。つまり、イギリスの産業主義が19世紀末には頂点を過ぎ、海を越えてその展開が新大陸アメリカに及ぶのである。産業の集大成であるひとつの象徴は、アメリカ大陸横断鉄道であり、自動車の発達である。この経済発展は、銀行家のモーガン、鉄道王のヴァンダービルトやヒル、石油王のロックフェラー、鉄鋼王のカーネギーなどの大富豪を生むことになる。反面そのことは貧者を生んだことも示されるであろう。アメリカの大富豪の対極には貧困者が隠れた所にあり、その社会現象への一場面を今から検証するウォートン作品の『歓楽の家』の主人公が体現しているように思う。豪商の息子や孫たちが、父祖伝来の財産を守り、ヨーロッパとは一種異なる階級社会を作り出し、その閉鎖性を内包する社交界で潰されてゆく一人の女性の短い一生である。

3. 鉄道・自動車の技術革新の意味するもの

鉄道は、鉄鋼の需要を促した。西部開拓が進む中、1862年エイブラハム・リンカーン大統領のもとで、太平洋鉄道法が制定され、連邦政府の財政支援のもとで、1869年、大陸横断鉄道が完成している。それは、1848年のカリフォルニアでの金の発見により、米大陸を東西へ往復するための手段としてその事業は加速したと思われる。その二年前、1867年、この作品の作者、ウォートンの友人家族でもあったヴァンダービルト (Cornelius Vannderbilt) により、ニューヨーク・セントラル鉄道とハドソン川鉄道が一緒になった東部鉄道会社の合同が進んだ³⁾。

作品中、主人公 Lily Bart が登場するのは、ニューヨークのグラント・セントラル駅構内である。まさに、作品の冒頭で、この時代を反映する場面を提示している。実際、作家ウォートンが、1900年代に自動車を知った時期に、列車は‘inconvenient’だという表現をしている⁴⁾。

しかし「少なくとも1916年までは毎年の富の余剰額の相当の部分が鉄道に投資された。運輸機関は国家を作り上げるために必要不可欠であるという根本的な事実は明白であった。そして国家の進歩に賭けようとするアメリカ人の熱意が鉄道の場合ほどははっきりとあらわれているところはほかになかった」と経済史学者である H. フォークナーは、その資本調達及び経営に賭ける民間の勢いを明言している。鉄道は州議会が票決する認可状のもとに設立され、資本の調達を助けるために特殊な金融上の特権、認可状が与えられたとある。一旦認可がおりると、鉄道は、連邦州、カウnty、市もしくは個人の応募者から得られる資金や信用によって建設された。このような仕組みが、アメリカの運輸業における、投機家を生み出し、債権や証券として売られ、経済の成長、競争とともに富の配分

が行われたのである⁵⁾。産業化はこの鉄道敷設にぐいぐい推し進められ、自然は破壊され土地は奪われる者も、ただひたすら近代化社会の道に飲み込まれて行くのである。

また、第一次世界大戦が始まった1914年に、全米の車登録台数は約126万台⁶⁾と言われているが、まだ「自動車が快適だ」といえるには間がありそうである。エジソンが実用白熱電球を発明し、1880年に工場生産が開始された頃である。電気の需要も拡大したことが窺われる。その経済の競争と成長と富の配分においてバランスは歪に崩れ、1892年アメリカ労働史上でもっとも激烈な争議として知られるホームステッド・ストライキが起こる。

それはカーネギー鉄鋼会社のペンシルヴァニア州ホームステッド工場における争いで、ついに州兵が出動して労働者側を押さえつけたという史実がある⁷⁾。そこで、その翌年1893年に経済恐慌が始まるのである。前述した数々の大富豪が生まれた反対側には、労働者という経済社会のひずみの中で、ひとつの階級格差がすでに起こっている。

南北戦争後の混乱期を過ぎ、アメリカにおける資本主義経済が無慈悲にも経済的弱者に搾取を繰り返しつつ繁栄を遂げ、アメリカ独自の経済発展を進めようとする中、ウォートンの描く女性主人公 Lily は、ピューリタニズムというアメリカ東部、ニューイングランド特有の社会規範を守る、これまでの精神性を礎とし、倫理道徳的に墮落した女性にもなれなかった。流動的経済変動については無知でありながら、ニューヨークの富裕階級の伝統的志向には、忸怩たる思いを持ちつつ、彼らの欺瞞的態度に対して反発を感じていた。しかし、自らが、産業革命の只中、そのひとつの歯車である労働者として、働くことができれば、この苦境を乗り切れたかもしれない。しかし優雅な生活に抗しがたく、生きる情熱も失い自らの命を絶つ、彼女は

急速なアメリカにおける資本主義経済構築の陰を体現することになる。

4. 経済用語の意味するものから

この作品では、最初の場面から文学的用語に混ざって、多くの経済用語が使用される。29歳の女性主人公、リリーが登場するのは、まさにその当時の技術革新により、人の移動は、馬車と列車が、後には自動車が移動する手段として混同する時代である。このような時代にあって、最初の場面で、リリーが親しい友人セルデンにあったときの次の会話には経済用語が噴出する。

“Ah, well, there must be plenty of capital on the lookout for such an investment. Perhaps you'll meet your fate to-night at the Trenors.”

She returned his look interrogatively.
(H.M. p. 12)

リリーの投資物件 ‘investment’ は、何なのか、資本 capital はどれほどあるのかが、彼女の生き方すべてにこれらが関わってくるのだ。彼女の一生は自らが知らないうちに商取引の闘いに巻きこまれている。

capital も invest するものをも持つ人、その筆頭が、銀行家であるモーガンであり、鉄道のヴァンダービルトであり、鉄鋼のカーネギーであったりするわけで、すでに豊かな経済社会のピラミッドの上層階級が存在する。彼らがアメリカの経済発展の成功者であるとすれば、自らがリリーという不確かな投資物件、そして彼女の ‘美’ が資本である。従って、わが身の美の維持に没頭しなければならず、商品でもある自分自身の美を投資し、それを買うことのできる者との間で、取引されるのである。

しかし誰がその取引の買い手となるのか。この商取引のシステムを操作できる人物は、誰に

なるのか、物語は「経済力」を持つ男たちが、装飾的機能を持つ人間動産であるリリーという名の女性が取引することと読み取ることができる。リリーが、知的で自主的行動のできる自身、「美を保つ売れる魅力」に固執し、それを維持する自発的能力を持たない限り、誰かに頼る寄生的生き方を取らねばならないことを自らが選んでいる。彼女がどこに寄生するかが問題なのである⁸⁾。

このことを H. ジェームズが、「仲間入りを許されるためには、多額な金を支払うことのできる経済力があることであり、それほど明確ではないが、もうひとつは「そこに群がる人は…特に女性は…“はずかしからぬ”人物である」ことであると、指摘している⁹⁾。

一番信頼していた人物、セルデンとの会話の後すぐに、パーティに招かれている話題になり、その時、セルデンがその類のパーティは退屈であると言ったのに対し、リリーは、それでもなお行くという理由を、二人の会話の中、次のように続けている。

“Then why go?”

“It’s part of the business...You forget!
And besides, if I didn’t, I should be playing
bezique with my aunt at Richfield Springs.”
(H.M. p. 12)

と、いうふうにリリーには、これが仕事の一部であるというわけである。もし行かなければ、伯母とトランプの遊びの一種であるベジークをしなくてはならないという理由をあげている。当時の有閑階級の間では、室内でのこのようなカード遊びは時間の過ごし方としてごく当たり前であったようだ。しかし、彼女の生涯の目的は彼女の美の維持でありそれに没頭することである。それは、「売れる魅力」を営業しなくてはならないわけで、そこに売り手と買い手という

ビジネスが成り立つことになる。しかもそれは、確実な書類上の契約とまで行き着かなくてはならないのに、リリーの駆け引きは有閑階級女性の中で、現代で言えば、訴求力を欠いている。しかもその生き方を選んだリリーが望むものであったかどうかが問題である。

リリーにとっては、有閑階級の女性の慣習であるお茶の時間が度々披露される。最初の場面でセルデンに会った時もそうであったし、次にペロモントに行く列車の中で、パーシー・グライスに会った時にもお茶を飲む。彼女にとってその行為自体が、自己表現の華々しいショーとなる。他人に自分を知らせるよい機会なのである。ここでもお茶は単に二人にとってのコミュニケーションのツールのひとつであり、リリーがパーシー・グライスに話す内容を持っていないことが、明らかである。ふと、彼女はグライスの『アメリカーナ・コレクション』蒐集の家系であり図書館まで持っていることを思い出す。グライスの職業は次のように描写されている。

...but on Jefferson Gryce’s death, when another large property passed into her son’s hands, Mrs. Gryce thought that what she called his “interests” demanded his presence in New York. She accordingly installed herself in the Madison Avenue house, and Percy, whose sense of duty was not inferior to his mother’s, spent all his week days in the handsome Broad Street office where a batch of pale men on small salaries had grown grey in the management of the Gryce estate, and where he was initiated with becoming reverence into every detail of the art of accumulation.

As far as Lily could learn, this had hitherto been Mr. Gryce’s only occupation, and... (H.M. p. 20)

父親の死後、財産を譲渡されたパーシー・グライスは、母親の智恵でニューヨークに居ることとブロード通りの事務所不動産の財産管理を学び、その経営が彼の職業となっている。そこで青白い顔をした男たちというのは、彼が雇っている側、つまり労働者側であり、パーシーは資本家の側に立つ。資本を持つ者は、労働する者を使ってその資本を増やし、利潤を上げる経営をし、管理する。その利潤を資本とし、新たな投資をする。この一巡で経済は回る。従って、リリーにとって、このパーシー・グライスは理想的相手の一人となる。

そのような思いをめぐらしているうちに、汽車がガリソンズに止まり、ミセス・ジョージ・ドーセットが乗り込んでリリーの思考は止まり、リリーの隣の席は、パーシー・グライスから G. ドーセットに取って代わり、彼との個人的会話も不可能となる。

また、ベロモントに到着後、この G. ドーセット嬢が P. グライスに食指を伸ばすが、思うようにはいかない。リリーにとっても、P. グライスを選択することは、彼女にふさわしい人生の選択ではないように思える。次の描写が、リリーには我慢できない環境である。

As she entered her bedroom, with its softly-shaded lights, her lace dressing-gown lying across the silken bed-spread, her little embroidered slippers before the fire, a vase of carnations filling the air with perfume, and the last novels and magazines lying uncut on a table beside the reading-lamp, she had a vision of Miss Farish's cramped flat, with its cheap conveniences and hideous wall-papers. No; she was not made for mean and shabby surroundings, for the squalid compromises of poverty. (H.M. p. 23)

彼女の恐れる形はミス・ファーリッシュである。彼女のようになることを避ける気持ちで一杯である。しかし現実では、金のかかるブリッジというゲームをし続け、結局は300ドルという当時の平均的労働者の年収以上の金を擦ってしまったことに気づき、小切手帳にも僅かしかないことが分かる。おまけに鏡に映る自分の顔に二本の皺という欠陥品としての自分に、避けがたい疲労の痕跡を認める。

その時リリーには、自分の父母のことが頭をよぎる。10代の時期には、母親がうまく金銭の舵取りをしていたのだ。それは「銀行通帳が示す以上に金持ちであるかのように生活できた」のである。リリーには 'decently dressed' (上品な身なり) をしているよう育てられた。最も忌み嫌うのは、豚のような生活をすることであり、たとえ金持ちであっても、それは人の好みの問題であると彼女は考えた。

しかしこのリリーの考えを変えなければならなくなったのは、彼女が19歳の時だった。夕食時、父親が破産したことを告げる。その時のリリーの家族の様子、破産後の母親の態度、そして父親の死、その後の身の処し方など回想が続く。経済状態に合わせて切り盛りすることの無意味さを斟酌しないことによる、その能力を失ったことなどを意識し、貧しさはリリーに取って不名誉なことだと感じた。リリー自身も彼女の母にも残された財産は、唯一リリーの美しさである。次の文章はそれを明確にしている。

Only one thought consoled her, and that was the contemplation of Lily's beauty. She studied it with a kind of passion, as though it were some weapon she had slowly fashioned for her vengeance. It was the last asset in their fortunes, the nucleus around which their life was to be rebuilt. She

watched it jealously, as though it were her own property and Lily its mere custodian; and she tried to instill into the latter a sense of the responsibility that such a charge involved. (H.M. p. 29)

母親の慰めは、リリーの美しさを思うときだけである。彼女の美しさが、このような状態に陥った世界への復讐の武器となると確信しているからである。母親はリリーを自分の所有物と勘違いしている。リリーが自立してゆかないとか、自分で自分の人生の違う立場から切り開いていけないのは、この点にあるのかもしれない。

しかし、リリー自身の将来は、経済的なことのみにとらわれているのではないとしても、彼女の好みは、政治的野心を持つ高大な土地を持つイギリス紳士 (English nobleman) だと言う。二番目の好みは、ヴァチカンに代々職務を持つイタリア人王子だとする。これらの考えは父親から受け継いだ読書好きという嗜好により、今目前に立ち向かう現実を認識することよりも彼女の想像力がそうさせたのだった。

二年間、気持ちが一致しない母親と放浪の旅が続く。そしてミセス・パートは亡くなる。家族会議の末、リリーの父方の姉、つまり伯母である、ミセス・ベニストンが彼女を面倒見ることになる。これから以後、リリーは、ミセス・ベニストンを後見人とする。

彼女はミス・トレナーのところに居候し、彼女の小さな雑事を手伝う羽目になる。同時に多くの取り巻きたちの噂を耳にする。そしてお茶の時間を終えた後、偶然にもローレンス・セルダンがやって来たことに気づくが、間に邪魔が入る。

毎週日曜日は、リリーの役目はトレナー家の子どもたちを教会に連れてゆく事であった。それは彼女がその任務にふさわしいと思われたか

らである。このことは、日常の彼女の宗教の習慣によるものである。次の文がそのことを表わしている。

Lily had hinted to Mr. Gryce that this neglect of religious observances was repugnant to her early traditions, and that during her visits to Bellomont she regularly accompanied Murial and Hild to church. This tallied with the assurance, also confidentially imparted, that, never having played bridge before, she had been “dragged into it” on the night of her arrival and had lost an appalling amount of money in consequence of her ignorance of the game and of the rules of betting. (H.M. p. 42)

このことは、リリーが小さいころから、教会に行くような、宗教心厚く、謹厳実直といった、B. フランクリン以来のピューリタンの生活基盤を持っていることを示す証である。このような節度ある暮らしぶりが、アメリカ移民の初期からの開拓精神と合い通じる生産的生き方として、社会をよくすることへの共通点としてあげられる。従って、この精神に沿うことでリリーは、心を平安に保てる。暇を使い豊かに遊ぶ有閑階級の良しとする行為とは反対なのである。しかもブリッジをしたことがないリリーはそのルールも知らず、ぞっとするような額のお金を擦ってしまうわけだから、益々心を平静に保つことはできない。

しかし彼女のそうした幼い頃からの習慣は、徹底しているわけではない。教会は行くことがわかっていてもそれは、気分の問題である。広大な敷地を持つ、トレナー家の田舎の別荘は1マイル離れたところに教会を持ち、それには馬車が用意されている。それにもかかわらず、だれもそれを利用しない。それに乗るはずのリ

リーも、セルダンと一緒に行くことをのぞんでいたわけだが、それも叶わず、結局午後の時間を二人で散歩することとする。リーには、セルダンが誰よりも感じのよい相手であることを感じとっていた。しかしいつの場合にも邪魔が入るのである。それはある人の存在でもあるが、それ以上にリー自身の精神の迷いを次の描写が示す。

But Lily, though her attitude was as calm as his, was throbbing inwardly with a rush of thoughts. There were in her at the moment two beings, one drawing deep breaths of freedom and exhilaration, the other gasping for air in a little black prison-house of fears. But gradually the captive's gasps grew fainter, or the other paid less heed to them: the horizon expanded, the air grew stronger, and the free spirit quivered for flight. (H.M. p. 52)

彼女の心の中に湧き出る思い、それはひとつには「自由」と「興奮」であり、もうひとつは、「牢獄」の恐怖である。この時、ウォートンが主人公に「自由」を選ばせ優先させた結果が見て取れる。結婚を囚われの身とする生き方よりもあくまで自由奔放であることの選択肢は、H. ジェームズ作品のアメリカ女性描写の中でも典型的な表象である。

この自由を手に入れるためには、主人公リーがどのようなことをしなくてはならないかということになると、リーには差し迫って労働という手段が何を意味するのか、理解ができていない。リーには他との比較において圧倒的な強みはある。社交界の中で称賛されることが多いことを自覚している。その一番の極みの場面は、新興成金のブライ夫妻が主催したパーティでの活人画の一こまに出演した時である。

上流階級の人たちの間で話題を独占することになる。しかしその美しさは、長く続くわけではない。

ここにこの時代の女性の社会的・文化的役割との関係そして背景を調べてみる必要がでてくる。

3. 商工業社会発展の時代におけるリーの無知と無垢

まず、E. ウォートン作品の時代背景を検証してみる。

ウォートンより前にキリスト教的人道主義の立場から、Harriet Beecher Stowe (1811-96) は *Uncle Tom's Cabin* 『アンクル・トムの小屋』(1852) を著したことで、大ベストセラーになったのは、奴隷解放運動への動きと同時に、一般社会の目が、社会的弱者へ注がれ、社会の半数を占める女性へと向けられたと解釈できる。また、それは、女性自身の意識変革へと波及した。

長い間、ヴィクトリア朝 (19世紀後半) の女性が理想とされていて、白人の中産階級は、信仰心、純潔、家庭的であることなどを最も重要視しており、続いておこる南北戦争 (1861-65) から男性不在の家庭を守るのは、英国から米国に及んだそうした意識を確実に持つ女性の役割にあった。こうした中で、中産階級の儉約や自助といった方向に進む女性たちはアメリカンドリームとはまさに反対の着実な質実剛健の生活態度を持ち、看護婦や教師といった教育や訓練による自己確立への能力を獲得する者も出て来る。ピューリタニズムの継承者であることは、勤勉で礼節を持って人に接し、道徳規範も持ち合わせていて、商工業社会における人間関係は円滑に進む。このピューリタンの体質は、アメリカ移住後何年にも渡って実利主義のフランクリン的体質と重なり、自ら懸命に働く者と、反対に、工業化への関心から労働力は機械に代わると考える者に分かれてゆく。従って、労働者

は機械に取って代わられるとする意識さえ誕生する。このことを、鷺津浩子氏は、『時の娘たち』の中で、「労働の機械による置換は、E. マイケル・ジョーンズが指摘しているように、『テクノロジカル・サブライム』の一形態とも考えられる」と述べ、続けて、「ピューリタニズムに見られる精神／肉体の二項対立は、機械による肉体労働の代行によって、肉体を離脱した、より高尚な精神に近づけるという機械信仰を生み出したのである」と述べている¹⁰⁾。そのような商工業社会が、過渡期にある経済社会は益々資産家と成金、そして何も持たざる者と差別化されてゆく。

しかし『歓楽の家』で描かれるリリーは、その能力を磨こうとする知恵は持たないし、社会意識に目覚めているわけではない。上流社会がどのようなものであるか、母親からの口癖から、理解しているつもりが、その仲間入りを果たすための自己研鑽に励む気持ちもない。彼女は中流社会にも属することは「金と地位を取り戻すの」といい続けて亡くなった母の願いに反することになり意に介しないし、そうかといって、上流社会に属することに敗れた女性である。それはリリー自身がその名の示すとおり、無垢であるということである。同時に社会性の欠如であるし、そのように教育されたことに起因する。

次の場面は彼女がだまされたことさえ気がつかないことを示している部分である。

“Pay up?” she faltered. “Do you mean that I owe you money?”

He laughed again. “Oh, I’m not asking for payment in kind. But there’s such a thing as fair play—and interest on one’s money—and hang me if I’ve had as much as a look from you...”

そもそもお金を借りているという感覚がリ

リーにはなかった。リリーは遊びのつमりのブリッジでの賭けで多額のお金を失い、残った少しのお金を投資するためにトレーナーに渡したはずだと信じていた。トレーナーの策略は、彼女のために投資金を増やすとみせかけ、彼女に見返りを求めたものである。実は彼女から感謝の言葉を要求すると告げるのだが、それが何を意味するものか、リリーは実社会の社交術を持ち合わせていない。

これは、H. ジェームズの『黄金の盃』(1904)のシャーロットにも似て、社交界の人たちから守られることもなく、その社会の網に絡め取られ、富も地位もなくしたし、トレーナーという一時的な成金、つまり新興勢力の罠にはまったことは、『ある貴婦人の肖像』のイザベラにも似ている¹¹⁾。イザベルは金を持っている女性であるからこそ狙われたのだ。

トレーナーもアメリカの新興勢力の一人とみなしてよい。彼は投機を賭け事と同類の遊戯、すなわち「生産のための投機」ではなく、「消費としての投機」をしていたのではないか。それは、リリーにもあてはまることで、投機に要する資金を得るために投機するという同道巡りの行為でもあった。リリーは、資本を生み出す投機が当面必要なのだが、投機する技量もなく、それならば本人に代わって投機を行う者が必要であったが、その人脈がなかったわけで、新興勢力の中から人を探さざるを得なかった。

そして、リリーは、労働という生産活動に求められる必然的要素を環境変化の中で発揮することはできなかった。そのことを意識し労働を基に同時代に社会と戦った女性が多い。

社会活動家、エマ・ゴールドマン¹²⁾のように、カーネギー鉄鋼会社の工場で起こった騒ぎの最中、愛人の資金調達のため売春を決意（実際に売春をしたかどうかは定かではない）、看護婦の資格も得て、資本主義の搾取される側に対峙する勇気を持ち、仲間と経済搾取を取り上げ

る。彼女によれば、売春は資本主義とピューリタニズムという「アメリカ的状况」の産物であると、亀井俊介氏が指摘する¹³⁾。また、マーガレット・サンガーのように、貧困や差別を実人生の中で戦うような女性もいて、彼女らの属する社会階級に翻弄されながら、女性たちは自分自身を賭けて社会に訴えかける。H. ジェームズが、*The American Scene* で語るように、裕福になった者たちも階級関係の意識が確かでなく、自分の位置が一体どこなのか、何故その高い位置にいるのかさえわかってなく、古い社会以上にこの若い社会は、自分たちがどのような意味を持つのか教えてほしいという姿を表わしていると言うのである¹⁴⁾。若いアメリカ社会の金を急に手にした者には、無邪気なままで、その個人の生活の物質的豊かさをことで、何をすべきなのかを古い社会に問うている状態である。古きよきオールド・ニューヨーク生まれの「上品な伝統」を維持する作家ウォートンは、富裕階級生まれの主人公リリーの無垢を備える典型的アメリカ女性の没落家庭の生き様を、その富裕階級社会の中での戦いとして描いた。

4. フェミニズム理論とジェンダー的見地から

女性が、‘人間として生きてゆくために’と考える時代にはまだ少し間がある。18～19世紀のヨーロッパを端緒とするフェミニズム理論は、ヨーロッパ近代に源流を求めており、市民革命の中で形成されてきた人権思想が直接の源であろう。これら直接の源は、フランス革命から社会全体へ波及していったと考えてよいだろう。解放という言葉は、女性の解放へとつながったわけだが、現実社会はこれを実現するためにあまりにかけはなれており、この関わりを描くには、ウォートンはあまりに不似合な世界にいた。彼女自身は少なくとも社会主義的思想の持ち主とは思えないし、政治に物言えそうな友人を持

ちながらも、むしろ政治には程遠い存在のように思われる。そして彼女の生まれ育った環境は、男性社会の経験の理論化が長年通っていて、‘持つ者’と‘持たざる者’の分け方で言えば、持つ者たちから成り立つオールド・ニューヨークである。イーディス・ウォートンは、社会的にも文化的にも富裕階級の作家としてある程度地位を築いてきた。しかし、この近代社会が、女性をより拘束する社会だと言えなくもない。この社会は女性を封建的家族制度から女性個人が解放されたという、認識に一部納得させるものでもあるが、女性を社会的生産の場から排除し、‘家’という個別の社会の最小単位で、評価としての賃金を得るわけでもない地位に押しやったとも言える。

そういった中で、比較的経済的余裕を持つにせよ、ヴィクトリア朝（1837-1901）後期イギリス王室から広がった中産階級に向けてのメッセージである、子だくさんの典型的幸せな家庭の絵は、ウォートンには描かれていない。自らが営む家族優先志向はむしろ感じられなく、夫への不信と精神病で、1911年の作品 *Ethan Frome* に著されるように、結婚への絶望感がみなぎっている。離婚後の15か月間ウォートンはアメリカにじっといるわけではなかった。この意味では、ヴィクトリア朝時代の中産階級のカウンターカルチャーとしての、ウォートンの姿が想像できる。

1914年には、第一次世界大戦が勃発し、彼女の経済力が示されるところである。作家ウォートンが、自立する女性として、社会貢献できたものは多い。彼女は進んで慈善事業に没頭した¹⁵⁾。例えば、女性のための作業所開設、お針子を雇用し、ベルギー人の難民収容所、老人、子どものためのコロニー、結核患者のサナトリウム、職業訓練学校など開設している。ウォートンの財力は後、次第に弱まるのであるが、彼女の広い人脈により、救援活動はヨーロッパか

らアメリカにまで広まる¹⁶⁾。

女性の特性として、やさしさや平和が挙げられるが、優しさを裏付ける精神的余裕である強さもなければ、実行力が伴わない。その意味においても、ジェンダー的検知から見られる女性の役目としての彼女の貢献度は、経済力があり社会的信用度のある人脈に裏付けられた、しっかりした行動力を示すものである。しかしヨーロッパは、第一次大戦に突入し、何時止むともわからない不安の中で、彼女の慈善事業は続き、大戦が終わったときには彼女自身が極限状態にあったとされる。

む す び

アメリカは自由の地である。従って、作品中、従来の貴族社会やアメリカ上流階級の枠を超えた恋愛と結婚をリリー・パートは望んだ。彼女は、貴族的消費は教養の発揮であり、自己実現の場であると思い、自身は労働とは無縁であると思った。主人公がたどった運命は、自己実現の場を消失したことに起因し、一連の行動は次のように整理できる。

1. アメリカ型資本主義は、労働と消費の両者が揃って初めて成立するため、主人公にとっての生活は労働をしなくとも収入を得られる社会とは決定的に異なる。
2. 主人公が資産を使い果たした時点で、自己実現の場を失ったため、それを再び得るには、自己の行動を変えるか、新しい収入源、この場合は結婚相手を見つける必要が生じた。
3. 主人公はまず後者の行動に出るが、上流階級の男性に非貴族的個性を求め、かつ、有閑階級の身分をも求めるという相反する要求を満たそうとするため、この行動は実現しない。
4. 次にとる行動は、自己の行動を変えることであるが、最小限の変化、すなわち、世間という、良妻賢母型女性にすらなり得ない。つ

まり家事労働などの労働力を提供できない。

5. 主人公は、過去の生活を変えようとせず、傾向延長型行動のままで、結果的に、事前の策も拒否し続け、最終的には最悪の策を受け入れざるを得ない。
6. 主人公は自己同一性の危機 (identity crisis) に陥るが、自己の同一性を適格な状況判断と意思の下に再構築、つまり戦略的行動ができなかったため自己矛盾を引き起こし、その解決策として自殺を選ぶことになる。

これらをまとめると、主人公は自己の所有する諸資本を、みずからの自由意思によって処分する経営体と考える時、この物語は主人公における自己管理能力と環境適応能力の問題を提示していると考えられないだろうか。

注

テキストは、E. Wharton, *The House of Mirth*, (New York, London: W.W. Norton & Company, 1990)を使用した。本文引用はすべてこの版からであり、ページ数は、引用に続けてカッコ内に入れて示す。なお下線は筆者が引いたものである。

- 1) 『ヘンリー・ジェームズのアメリカ』藤野早苗 (採流社, 2004) p. 270
- 2) 『アメリカ古典文庫 10 ヘンリー・ジェームズ』アメリカ印象記の中で、大橋健三郎氏が解説している。(研究社, 1976) pp. 16-17
- 3) 『総合アメリカ年表』亀井俊介・平野 孝編 (南雲堂, 1990) pp. 72-101
- 4) *A Backward Glance*, (Edith Wharton, Charles Scribners' Sons, N.Y. 1964) p. 137
- 5) 『アメリカ経済史』下 Harold Underwood Faulkner 著小原敬士訳 (至誠堂, 1969) p. 628-629
- 6) 『車が語る人間模様』丹羽隆昭 (開文社, 2007) p. viii
- 7) 『総合アメリカ年表』亀井俊介・平野 孝編 (南雲堂, 1990) p. 95
- 8) 『アメリカ女性文学論』鈴江樟子 (研究社, 1997) p. 61
鈴江氏は、「女主人公リリー・パートの悲劇は、どこにも属し損ねた若い娘の悲劇である」と表現している。
- 9) *The American Scene*, (H. James, Lits, Las Vegas, Nevada 2010) p. 46
- 10) 『時の娘たち』鷺津浩子 (南雲堂, 2005) pp. 48-63

- ピューリタニズムの肉体労働と時間の関係を、また「時は金なり」という倫理観をとき放つ階級の話として提示されている。
- 11) 『女というイデオロギー』海老根静江、竹村和子（南雲堂、1999）pp. 123-124
H. ジェームズの作品『黄金の盃』を取り上げてそのことを指摘している。ヨーロッパの社交界のしきたりや慣習を形において従っているもののこの価値観の絡み合った社会の規範が登場人物の精神的、内的規範になっていない。
 - 12) Goldman, Emma (1869-1940) ユダヤ人の子としてロシア領リトアニアに生まれる。'86年にアメリカに渡り、労働者と付き合ううちに、無政府主義を信奉するようになり、1906年無政府主義の雑誌 *Mother Earth* を創刊、1917年に発行を停止させられるまで、編集主幹を務めた。第一次大戦のさいには、アメリカの参戦に反対するなどしたため、獄に投じられ、1919年釈放されると同時にソヴィエトへ追放された。しかし同国に長くは止まらず、スウェーデン、ドイツ、イギリス、フランスその他の各地で講演をつづけ、スペインに内乱が起ると、ファシズムを非とし、後カナダの Toronto で他界。（『英米文学辞典』研究社）p. 498
 - 13) 『ピューリタンの末裔たち—アメリカ文化と性』亀井俊介（研究社、1990）pp. 125-126
 - 14) *The American Scene*, Henry James, (Lits, 2010) pp. 50-51
 - 15) 『イーディス・ウォートンの世界』辻本庸子氏が、第一次世界大戦前後のウォートンの経済的状況について述べている。（鷹書房弓プレス、1997）pp. 37-38
 - 16) *A Backward Glance* (Edith Wharton, Charles Scribners' Sons, N.Y. 1964) pp. 347-360